



特集 サルの被害を消しサル!!

「ニホンザル追い払い隊」

自分らしく生きる楽しさを多様な働き方でかなえる

「安曇野流リモートワーク」

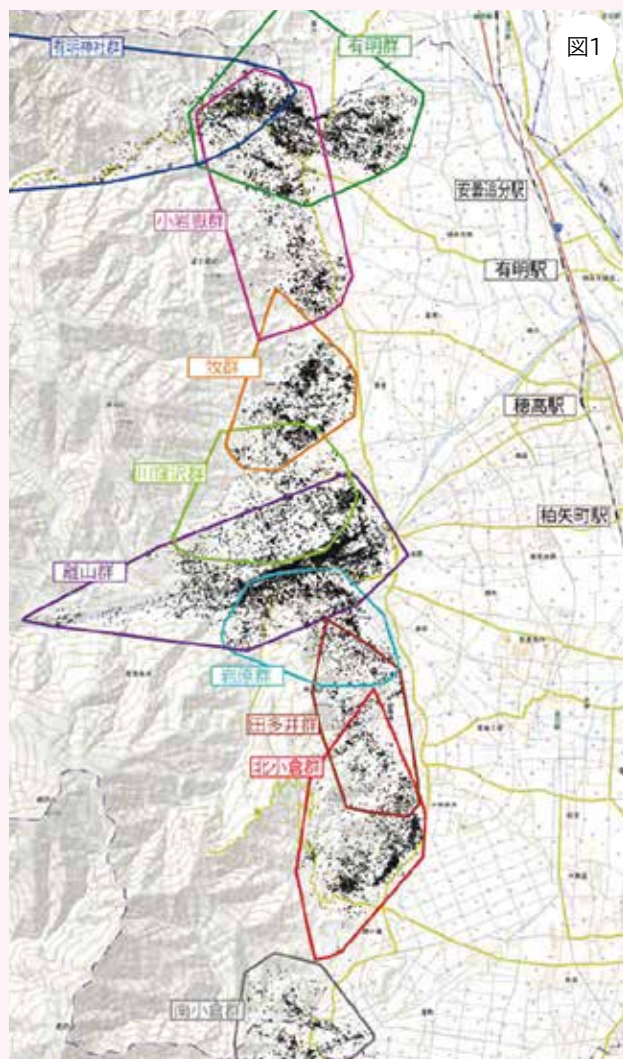
1 1年間の活動レポート

サルは山側に向かっていく

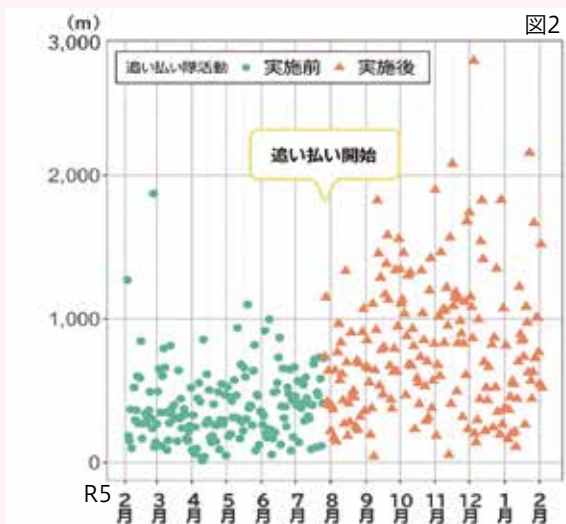
西山山麓に生息するサルの群れは、そのほとんどが山と里の境界付近に滞在しています(図1)。国営アルプスあづみの公園付近に出没する「離山群」は最大規模の群れ。また、有明地域では「有明神社群」「小岩嶽群」「有明群」の3つが生息しています。

追い払い実施前後のサルの移動距離(図2)を比較すると、実施前は集落側に98%いたサルが実施後には76.3%まで減少していることがわかりました。追い払いの継続で、少しずつサルの滞在位置を山に戻すことができています。

(資料提供:株BO-GA)



サル群れの滞在位置



追い払い実施前後のサルの移動距離



里に出没する頭脳系獣集団に対抗

サルの被害を消しサル!!

ニホンザル追い払い隊



近年、全国各地で相次ぐサルによる被害。市内でも西山山麓で農作物を荒らしたり人を威嚇したりする被害が問題となっています。市ではその対策として昨年8月に「ニホンザル追い払い隊」を結成しました。今回の特集では、1年間の活動から分かってきた変化や効果的な対策などを紹介します。

圃耕地林務課 TEL 71・2432

農作物は「魅力的なエサ」

本来山の中で暮らすサルは、群れが生息するテリトリーの中でエサを確保します。しかし近年、遊休農地が増えたことで山と里の境界があいまいになり、里にやってくる状況に。群れの生息域も山の中から里までの広範囲となっています。

サルは一度農作物を食べると「おいしいもの」と認識します。しかも山で取るエサより量も多く栄養があり、サルにとっては魅力的。その結果、怖がりながらも里へ下り、農作物を食い荒らしています。

全国でも注目の活動が始動

国や県が示すサルの被害対策には、その地域に住む人が主体的に取り組むこととされています。しかし、別荘など生活の拠点が市内にない人も多いという安曇野特有の生活スタイルや、捕獲に対して否定的な考えを持つ人など、意見の多様性によって地域ぐるみで対策することが難しくなっています。

この状況がありました。

この状況を打開しようと組織されたのが「ニホンザル追い払い隊」。サルの追い払いは有効な対策として全国各地で行われていますが、自治体規模で行う事例は珍しく、注目を集めています。現在は95人の隊員が交代で、毎日追い払いをしています。

判明してきたサル群れの情報

市では、追い払いを効果的に行うため雌のサルにGPS発信機を取り付け、群れの位置を把握しています。これにより、里に下りてきて被害を及ぼす群れは10群ということが分かってきました。また、群れの頭数は40から50が一般的といわれますが、市内には個体数が100頭を超える群れもあることがわかりました。一方、追い払い隊が結成して1年、地域の皆さんの協力もいただきながら活動してきた結果、徐々にサルの生息範囲が山側へ移ってきていることも分かってきました。

近づいていき距離をつめたり、怖い場合は爆竹や花火、エアガンなどを使用したりしてください。複数人で行うとより効果的です。

Q 追い払いなんて意味があるの？

A あります。サルに警戒心を与え、里とサルの住む境界線を理解させることがサル被害を無くすカギとなります。今後もより高い効果が現れるよう活動を継続していきます。

Q 追い払うより捕獲した方が良いのでは？

A 捕獲も当然必要な手段です。サル対策は捕獲、追い払い、防除の3つを組み合わせることが効果的です。しかし、エサとなるものが放置されている状況ではその効果が低減します。防護柵などで農作物や果樹を守る「防除」を一人一人が行うことも重要な対策です。

2 Q&A

よくある疑問にお答えします

Q サルを見かけたらどうしたら良い？

A サルを家の近くで見かけたら、すぐに追い払ってください。被害がないからそのままにしておくと、だんだん人間に慣れて怖がらなくなります。現状市内に出没するサルは、威嚇はするものの襲い掛かってくることはなく、人間が近づいていくと逃げていきます。追い払い方法としては、サルに対して



コラム

サル対策 ほうき作りが新たな一手

サル害対策と遊休農地を利活用した特産品の創出としてほうきを手作りしている「安曇野ほうきプロジェクト」。昨年試験的にホウキモロコシを栽培した結果、被害なく収穫でき、やわらかくて長持ちする純国産のほうきが完成しました。事務局の野中由紀子さんは「遊休農地に人が出入りすることで、ここは人のテリトリーだとサルに思い込ませられれば」とサル害対策への期待を込めます。プロジェクトは本年から参加者を募り栽培講座を行う



昨年完成したほうきを持つプロジェクト代表の丸山さん(左)と野中さん(右)



Instagram

など、活動を本格化させています。8月中には収穫し、脱穀。その後乾燥させ9月からほうき作りに取り組みます。



INFO 補助金のご案内

市では、農業者が農作物を鳥獣害から守るために防護柵の設置や機器の購入をする際の費用や、追い払いに使用するエアガンの購入費用に補助金を交付しています。

また、追い払いに使用するエアガンの貸し出しやロケット花火などの配布も行っています。

補助額などの詳細は市HP [こちら](#) を確認いただくか問い合わせください。

問耕地林務課 Tel.71-2432



3 サル出現の要因を無くす
すぐにできるサル対策にご協力を

POINT! 食べ物や生ごみを外に置かない

サルが好むトモロコシやカボチャ、果樹などは、収穫したら自宅の中に入れるか、サルから見えない場所に置きましょう。また、生ごみも外に置くとサルがあさりに来ます。

POINT! きちんと収穫する

カキやクリ、リンゴなどの果樹はサルの大好物。収穫しない木があれば登って食べています。できるだけ果樹は収穫しましょう。収穫しない木は伐採をご検討ください。

POINT! 辛味や香り、アクの強い植物を植える

サルはトウガラシやシソ、ゴボウ、ショウガ、ワラビなど、辛味や香り、アクの強い植物を嫌がります。野菜の周りにそれらを植えることも効果的と言われています。

INTERVIEW

まずは数値化できる被害を減らしたい

隊員になったきっかけは

安曇野の自然環境を守りたいと思い、隊員に応募しました。本来サルは山の中で暮らしているのに、人の住む里まで下りてきてしまっています。その理由の一つは、山と里の境界が分かりにくくなっていることだと思います。安曇野の自然環境は農業と一体で、畑に作物が植えられていることで人の手が入り、そのおかげで環境が保たれています。人の手が入らなくなると農地は荒れ、山との境界が不明瞭になります。

自宅近くで頻繁にサルを見かける中で、何かできることはないかと隊員に応募した加藤厚さんに話を聞きました。



ニホンザル追い払い隊 加藤 厚さん (穂高牧)



山の生態系が崩れ、バランスが保たれていないと感じるようになり、追いかけています。追いかけていくと「サルを追い払うだけでは生ぬるい。駆除してほしい」という意見を聞くこともありません。被害を受けている人にしてみれば当然の意見だと思えますし、山の生態系を守るため一定数を駆除することは必要だと考えます。

活動って感じのイメージは

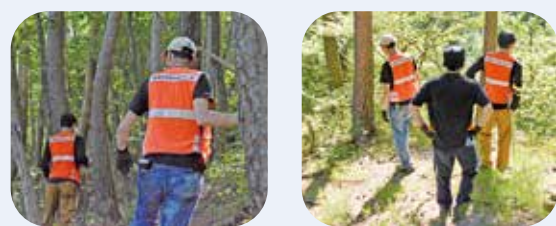
サルの生息している地域にシカやイノシシなど他の野生動物が進出し、徐々に頭数が増えるということもあります。「サルはいなくなっただけ、今度はクマが増えた」では困ります。山の中の食べ物だけで暮らせる個体数が理想で、山の生きものバランスが大切だと改めて感じています。そして、サルを追い払うだけでなく、出荷できない野菜などを畑の隅に放置するなどの誘因物の撤去や、山にも手を入れて境界を分かりやすくするなど、里山全体を総合的に整備していく必要があると感じています。

結成から1年。感想は

「以前よりサルを見かけなくなった。ありがたう」などと言われることもあり、多くの皆さんに活動を応援してもらえてうれしいです。サルの被害には、数値化できるものがないものがあります。「自宅に入ってくる」「畑などにフンをして困る」といった、数値では表わすことが難しい被害も当然ありますが、まずは「農業被害額が減る」といった数値化できる被害が減り、追い払いの成果が表れることが目標です。



2時間ほどサルを追い、里の班と合流。GPS に群れの位置を落とし込み翌日の班へ引き継ぎます。



サルが山に入っても活動は継続。この日活動していたもう一つの班と合流し、サルを山の奥まで追いやる班と里に来ないように追い払う班とに別れて活動。位置情報を共有し、サルを里から離します。



3方を囲むように体制を組み、サルの逃げ道を山側に作ります。サルは茂みや木に身を潜めて人間の様子をうかがっていることもあるので、音を立てるなどして追い払っていきます。



集合場所にいたらGPS で群れの位置を確認。1班3人体制で動きます。

追い払い活動に同行
活動の様子をレポート!